

「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっている。イエスの命がこの体に現れるために(Ⅱコリント 4:10)」。イエスの「命」は歓迎だけれども、「死」はどうも…と腰が引ける。そんな弱気を払拭させるように、言葉は変奏されてくり返される。

「わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされている。死ぬはずのこの身(肉)にイエスの命が現れるために(4:11)。「いつも(4:10)」、「絶えず(4:11)」、私たちが生きる日々の隅々にイエスの死があって、その死にイエスの命が現れる。

私たちは「土の器(4:7)」として生きている。イエス・キリストが、この弱く、脆く、粗末な土の器になられたがゆえに、私たちは「この体(4:10)」に、「この身に(4:11)」にイエスの死と命をまとい、土の器のまま「宝(4:7)」を戴く。

キリストを知るのか、出会うのか。いや服を着るように「まとう(4:10)」のだ。それほど分かちがたく、キリストと私が結びついている。土の器である欠け多き私においてキリストが連続していく。

キリストは御自分の死を私に与え、その永遠なる命が私に現われる。

成績を上げるには勉強、野球やピアノがうまくなるには練習、出世するには職場に貢献。世の事柄は努力と成果がおおむね比例している。だがイエスの命は「信仰力」で引き寄せられるものではない。ましてや善行を積んだとか、教会に尽くしたことへの、いわば褒賞として命が与えられるのではない。

精一杯の奉仕でも、金や銀でキリストを飾ってならぬ。土の器でキリストは連続しているのだから。

「わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負っていこう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す(イザヤ 46:4)。

信仰心や生き方と関係なく、ずっと「生まれた時から負われ、胎を出した時から担われてきた(46:3)」。それと「同じように(46:4)」、これからも。

担い(nasa)、背負い(sabal)、救い出す(miretto)という言葉は、直後の偶像(46:6)にも平行して使われている(46:7)。

人間は神の力を我が掌中に納めようと偶像を刻む(46:5)。素朴な信仰心からであっても偶像は、人間が操作しうる「宗教性」に神を貶める。いつの時代にも、あらゆる宗教にもある罪。

「わたしはあなたたちを造った(46:4)」。私たちはいつのまにか造られ、いつのまにか生まれ(46:3)、いつのまにか老いて死んでいく(46:4)。だが、造られっぱなしにされているわけではない。

被造物としてのこの私を、創造者なる神が省み、「わたしが担い、背負い、救い出す(46:4)」と宣言された。

この約束の重さ。精一杯な奉仕のつもりでも神像の鑄造は(46:6)、神の約束を軽んじることになる。

神が私を担い、背負い、救い出してくれる約束を信じられるだろうか。私たちは土の器で(Ⅱコリント 4:7)、弱く、脆く、欠けやひびもあって水漏れし、揺るぎない信仰とは程遠いかもしれない。だから「死ぬはずのこの身にイエスの命が現れ(4:11)」、「この身」、「この体」ごとキリストのものになる。

私たちは土の器としてやがて死ぬが、「イエスの死を体にまとっている(4:10)」。いつも(4:10)、絶えず(4:11)、イエスの死と命が共にあり、私たちは救い出される(イザヤ 46:4)。救いとは何か。「イエスと「共に(死と命によって)」、わたしたちをも復活させ(Ⅱコリント 4:15)」御前に迎えられる(4:14)ことが救い。



《おまけのひとつ》

金や銀でつくる神像 神や天使の像は 結局は人間をモデルにして刻まれ ゆえに下降するばかり
人間の像である土偶 抽象化された文様やマスク 土の器に納められた宝として 上昇していく